

【調査報告】

ソウル大学校蔵 伝宗碩筆『連歌老葉』

小林善帆

はじめに

ソウル大学校図書館は京城帝国大学が所蔵した図書を継承している。京城帝国大学とは、一九二六（大正十五）年学部開学の、当時植民地であった朝鮮に設立された日本で六番目の帝国大学であったが、一九四五（昭和二十）年八月十五日太平洋戦争終結とともに消滅した^①。今日、京城帝国大学時代の図書の全容を把握することは必ずしも容易ではない。

今回、ソウル大学校図書館調査の機会を得て紹介する同校蔵、伝宗碩筆『連歌老葉 評註』（以下、ソウル大本、またはソウル大本『老葉』と略称する場合がある）は、書誌的観察から室町時代後期の書写と判断され、また宗碩の没年が一五三三（天文二）年で

あることから、あくまで極札による仮説ではあるが、宗碩生存中の一五〇〇年代初期の書写であると想定しても不自然ではないと思われる。欠失部分が多く、錯簡はなほだしい零本であるが、『老葉』加注本の古写本として重要な位置にあるものと考えられる。日本の学界でも未紹介なので、紹介する価値のあるものと考ええる。

『老葉』とは宗祇自撰の第二句集で、初編本と再編本に大別され^②、その再編本に加注本が存する。注には宗祇自身による自注と弟子宗長の注があり、『老葉』本文に加注されている。その様態は（一）自注のみのもの、（二）宗長注のみのもの、（三）両注を併載するもの、の三種あり、本稿で紹介するソウル大本『老葉』は、（二）の一本である。『老葉』加注本の最終形態は、十七世紀末〜十八世紀初頭に版本として流布した両注併載本『愚句老葉』^③であるが、ソウル大本はそれらの初期の形態を持つ十六世紀初期

の写本と考えられる。

以下、新資料であるソウル大本の紹介とその評価への見通しを提示することから、その検討の端緒を開く。なお資料の表記については、新字体を使用した。

1 京城帝国大学における連歌関連図書所蔵の様相

現在、旧京城帝国大学蔵連歌関連図書は十四点(表1) 見出せる。このなかで写本はソウル大本『老葉』(表1 No.1) と、宗養『永禄五年八月十一日 賦何人連歌』(同 No.2) があり、両巻ともに美麗・典雅なもので、伝来の確かさが感じられる。

この二点についてソウル大学校に残された記録から、ソウル大本『老葉』は、一九三七(昭和十二)年二月六日「京城府本町一丁目四十八番地 金城堂書店 松野勝」から、十二円五十銭で購入。一方、宗養『永禄五年八月十一日 賦何人連歌』については、一九二八(昭和三年)三月二十六日「北沢書店」(東京)から、この『賦何人連歌』を含む卷子本十点を十円で購入している。この時、資料の題名も表示されないまま十点が購入されていることから、それほど貴重な資料として扱われていなかったことがわかるという⁸⁾。一九二八年は大学学部開設から二年足らずの時期であり、当時同校では多量の図書を購入していたといい、それを裏付ける

表1 ソウル大学校蔵「京城帝国大学」連歌関連図書一覧

No.	編著者名等	書名等	出版年等	発行元(出版社)等
1	伝・宗碩	連歌老葉 評註	写本	
2	宗養 (両吟)	永禄5年8月11日 賦何人連歌	写本	
3	紹巴	至宝抄	(No.4『初心抄』と合綴)	
4	紹巴	初心抄	1645(正保2)年	書林豊興堂
5	池田謙吉編	芭蕉翁親筆 連歌俳諧秘訣 上・下巻	1894(明治27)年	金池堂
6	福井久蔵著	和歌連歌叢考	1930(昭和5)年	成美堂書店
7	福井久蔵著	連歌の史的研究 前・後編	1930、31(昭和5、6)年	成美堂書店
8	古典保存会編	「連歌新式」影印本 附・鹿児島県立図書館蔵連歌新式解説	1931(昭和6)年	古典保存会
9	古典保存会編	「知連抄并梵燈連歌」影印本 附・宮内省図書寮御蔵知連抄并梵燈連歌解説	1932(昭和7)年	古典保存会
10	栗山理一ほか著	国文学試論 第三輯 (栗山理一「連歌論史攷——二条良基を中心として」)	1935(昭和10)年	春陽堂
11	山田孝雄ほか編	連歌法式綱要	1936(昭和11)年	岩波書店
12	山田孝雄著	連歌概説	1937(昭和12)年	岩波書店
13	山田孝雄編	連歌青葉集	1941(昭和16)年	畝傍書房
14	福井久蔵著	和歌連歌俳諧の研究	1943(昭和18)年	山一書房

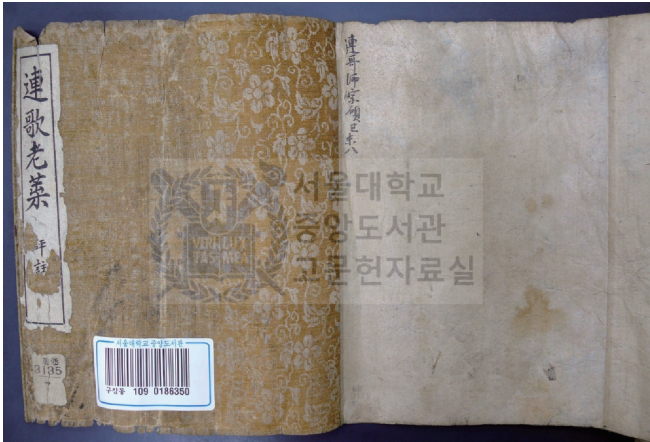


写真1 表紙と端裏

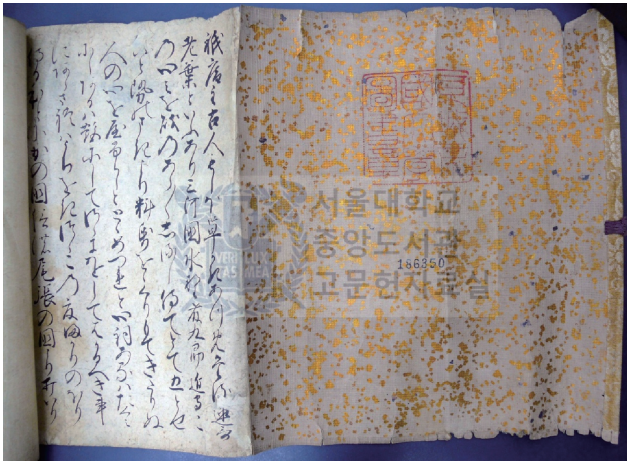


写真2 「京城帝国大学図書章」朱印

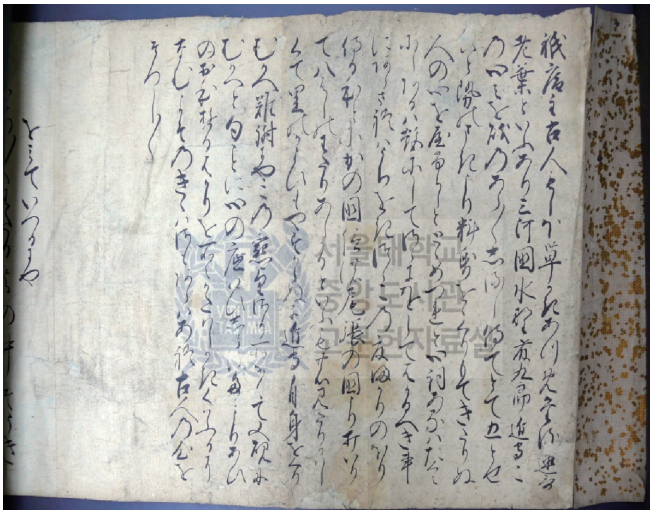


写真3 序文

ものともいえよう。

京城帝国大学は法文学部、医学部の二学部をもって学部開学しており、連歌関連図書はこの法文学部国語学・国文学講座に属するものであったと思われる。同講座教員は着任順に高木市之助⁹⁾(在職年一九二六―一九三九、国文学)、時枝誠記¹⁰⁾(同一九二七―一九四三、国語学)、麻生磯次¹¹⁾(同一九二八―一九四二、国文学)、斎藤清衛¹²⁾(同

一九四二―一九四五、国文学)の諸氏がそれぞれ奉職していた。

右の二点のほか江戸前期の版本である『至宝抄』(No.3)・『初心抄』(No.4)、連歌研究者福井久蔵の著作(No.6・7・14)ほか、『連歌新式』(No.8)、山田孝雄ほかの著作『連歌法式綱要』(No.11)、『連歌概説』(No.12)、『連歌青葉集』(No.13)の所蔵などからは、連歌研究のみならず連歌実作への関心も窺えよう。

2 書誌

i 体裁・寸法

- ・十六世紀初期（室町時代後期）写本、伝宗碩筆、卷子本一卷。
- ・軸存、紐末端のみ存、箱なし
- ・紙高二・五センチ、軸共二・二センチ
- ・全長（表紙・軸を含む）五〇三センチ、表紙一紙、紙数墨付
- ・二三紙、補紙一紙、一紙長一四・五センチ（第二紙）

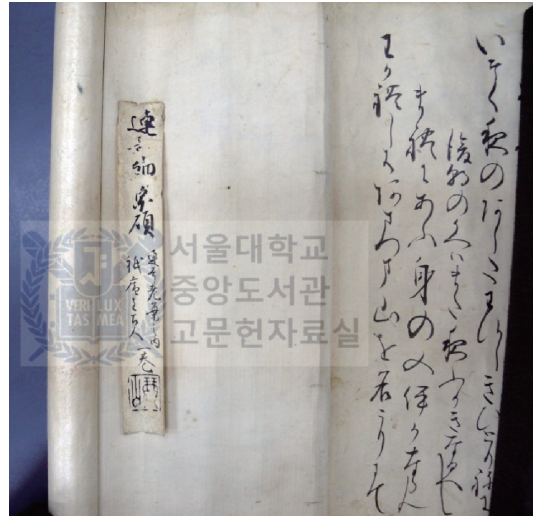


写真4 卷末貼紙 古筆琴山の極札

- ・表紙 花文織出金地布表紙
- ・見返 金銀箔散し。中央に「京城帝／国大学／図書章」の朱方印あり
- ・題簽「連歌老葉 評註」（「葉」は異体字、写真1参照）
- ・題簽の下に京城帝国大学図書館の図書ラベル「巻軸／3136／7」あり
- ・端裏「連歌師宗碩己未八」
- ・卷末貼紙 古筆琴山の極札 縦一三センチ、横一・九センチ
- ・（表）「連歌軸 宗碩 連歌老葉之内
祇庵主古人 一卷（琴山・黒方印）」
- ・（裏）「半本継合巻物 己未八（栄・黒小判形印）」
- ・折り皺あり。傷みは第一紙の上下に若干の破れあり。虫損なし
- ・鉛筆書き入れ五カ所

ii 端裏・極札

まず端裏の「連歌師宗碩己未八」とは、いつ、何がなされたことをいうのであろうか。「己未八」に当たる年月として、『老葉』成立（一四八〇年代）以後は一四九九（明応八）年八月があるが、本テキストの序文成立が一五二〇（永正十七）年¹⁵であるためそれ以後となる。しかし次の一五五九（永祿二）年八月とすれば、宗碩（一四七四～一五三三）は他界している。一方、題簽の文字

「葉」の特徴や「評註」という言葉の使用から、軸に仕立てたのは江戸時代と思われる。これらのことから、一五二〇年以降一五三三年までに写されたものを、江戸時代の「己未八」に軸に仕立てたものと考ええる。

次に極札（鑑定証）を見ると、「琴山」並びに「栄」の極印（鑑定証印）を使用した「己未八」の古筆見（古筆鑑定家）は古筆本家三代了佑であり、「己未八」は一六七九（延宝七）年八月をさすものと考えられる。筆跡からも三代了佑と思われる¹⁶。

また「連歌老葉之内 祇庵主古人 一卷」「半本継合巻物」とあることから、一六七九年八月には現在の、「祇庵主古人」から始まる零本継ぎ合わせの卷子本一卷になっていたこと、連歌師宗碩の筆跡であると、当時最も権威ある古筆見が認めたものであることがわかる。

iii 形態

同本は、当初糊離れによって順不同の断片になっていたものを、どの段階、どの時期であるかは不明であるが、繋ぎ合せて卷子本一卷に仕立てたと思われる。その結果、現存している句数が一六〇句と、本来二〇〇五句ある両注併載本『愚句老葉』（以下、『愚句老葉』と記す）の八パーセントに満たず、さらに紙継

表2 ソウル大本『老葉』データ一覧

紙番号	ソウル大本順	部立	紙長 (cm)
1	表紙		19
2	序文		14.5
3	序文 (続き)		11.5
4	191 注~ 198	春	14.5
5	199 ~ 203	春	14
6	85 注~ 99	春	29.9
7	133 注~ 140	春	29.7
	41 注~ 45 注	春	
8	145 注~ 149 注	春	29.4
	31 注~ 38	春	
9	155 注~ 161 注	春	31
	22 ~ 29	春	
10	1900 注~ 1905	発句	15
11	1393 注~ 1397 注	雑上	14.7
12	572 ~ 576	秋	30.4
	526 ~ 534	秋	
13	1947 注~ 1951	発句	14
14	495 注~ 503 注	秋	14
15	915 ~ 923	恋上	14.7
16	1421 ~ 1427	雑上	14
17	1057 ~ 1073 注	恋上	31.3
18	602 ~ 608	冬	12
19	706 ~ 709 注	冬	29.8
	903 注~ 914	恋上	
20	1976 ~ 1981	発句	15.2
21	797 ~ 804	旅	30.7
	825 注~ 831	旅	
22	1179 注~ 1188	恋下	30.2
	951 ~ 956	恋上	
23	1131 ~ 1138	恋下	30.9
	1006 ~ 1011	恋上	
24	補紙 極札貼付		9

ぎが不用意に行われたと見えて、順序が錯雑している零本である。四季・発句の部立てを考慮した感もあるが、「春」以外は明確ではない。また「夏」と「雑下」の句は見当たらない（表2）。

以下、まず紹介方法として翻刻とともに『愚句老葉』の句順による復元作業を行い、欠損部分を確認できるようにする。『愚句老葉』は江戸時代に版行されて広く読まれたため、『老葉』の加注本として参照しやすいので、本稿ではその句番号を基準として使用する。

さらに『愚句老葉』及び、宗長序文・宗長注のみを持つ同種本として、完本である蓬左文庫本と比較して差異を検討し、ソウル大本がどのような性格を持つものかを考察する。

3 翻刻と復元

翻刻凡例

- 1 「ハ」は「は」になおした。
- 2 適宜、句読点、濁点をつけた。
- 3 漢字は新字体を使用した。
- 4 句の番号は『愚句老葉』（『連歌古注釈集』）による。
- 5 番号を四角で囲んだものは、その番号の句の注である。また、注が和歌の引用のみの場合もある。注は四字下げで記し、和歌は注よりも一字あげて記した。
- 6 発句に対し、詞書は二字下げて記した。

連歌老葉 評註

（端裏） 連歌師宗碩己未八

（序文）

祇庵主古人、もしほ草かきあつめたる、連歌老葉といふあり。三河国水野藤九郎近守、この

の心みを磯のあらくしるし侍てとて、五とせ六とせのさきより、料昏を、くりもてきたりぬ。

人の心をやぶらじと、とゞめつれど心詞、あるはたくみにし、あるは艶にしてさらにはかるべき事にあらざれば、うちをきつゝ、この夏まかりのほり侍るほどに、かの国、信濃、尾張の国より打いて八はしのわたり、あしがるといふもの、みだりがはしくて里のかよひもやすからぬに、近守自身をくりむかへ難謝にや、この懇望さり所なくて又硯に

のおぼゆるばかりを所々かたはしかきくはふるになむ。よそのき、はさもあらばあれ、古人の心をそろしく。

（欠損）

1（表3ブロック番号、以下同様）

（22） をとする水はこほりとけけり

（23） 雪うづむみ谷のを河春さえて

氷のとくるといふに、深山の余寒めづらしき付様なるべし。常には春かぜのあたゝかなる事をこそ付侍れ。

（26） 日かげしづかにうぐひすぞなく

（27） やまざとのかすむあさ戸にゆききえて

表3 ソウル大本『老葉』データ並べ替え一覧

ブロック番号	『愚句老葉』順	部立	句数	ソウル大本欠落句数
	序文			
1	22～29	春	6	2句欠
2	31注～38	春	5	2句欠
3	41注～45注	春	4	欠落なし
4	85注～99	春	10	3句欠
5	133注～140	春	3	4句欠
6	145注～149注	春	4	欠落なし
7	155注～161注	春	4	欠落なし
8	191注～198*	春	5	2句欠
9	*199～203	春	5(春合計46)	欠落なし
10	495注～503注	秋	6	2句欠
11	526～534	秋	9	欠落なし
12	572～576	秋	5(秋合計20)	欠落なし
13	602～608	冬	5	2句欠
14	706～709注	冬	4(冬合計9)	欠落なし
15	797～804	旅	8	欠落なし
16	825注～831	旅	6(旅合計14)	欠落なし
17	903注～914*	恋上	7	4句欠
18	*915～923	恋上	7	2句欠
19	951～956	恋上	6	欠落なし
20	1006～1011	恋上	6	欠落なし
21	1057～1073注	恋上	11(恋上合計37)	6句欠+2句入れ違い
22	1131～1138	恋下	6	2句欠
23	1179注～1188	恋下	5(恋下合計11)	4句欠
24	1393注～1397注	雑上	4	欠落なし
25	1421～1427	雑上	7(雑上合計11)	欠落なし
26	1900注～1905	発句	4	1句欠
27	1947注～1951	発句	3	1句欠
28	1976～1981	発句	5(発句合計12)	1句欠
			合計 160句	

*印198-199、914-915は続いている。

- 〔41〕 3
 (欠損)
 ほのかなる香にや。
- 〔38〕 よこ雲の空明やらでかすむよに
- 〔35〕 梅かほる夜のあり明の月
 のこるは月なるべし。
- 〔34〕 のこりてぞあはれはまさる春の花
- 〔33〕 霞たつ遠さとをの、ゆきさえて
 すみよしの岸、遠さとをの、眺望なる
 べし。
- 〔32〕 草ははるなるすみよしの岸
 るならんかし。
- 〔31〕 2
 (欠損)
 彩^{サイ}めをつけみるべきにや。詞のあたら
 しきとは、ふるき歌をかくいひかへた
 るならんかし。
- 〔29〕 昨日まで雪を忍じまのあさがすみ
- 〔28〕 めづらしとみるいまの一筆
 うちみるまゝにや。

春のよのやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやは
かくるゝ

(42) ころやはなのかげにあるらん

(43) うへをきし人はむかしのやどの梅

梅がかも身にしむ比は昔にて人こそなけれ春のよの月
梅がゝにむかしをとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にう
つれる

植をきし人の執心なるべし。

(44) 梅うちかほりゆきとくるころ

(45) 山もとの川ぞひ柳かぜふきて

河べの梅柳なるべし。

(欠損)

4

85 山守はいはゞいはなむ高砂のおのへの桜おりてか

ざゝん

(86) 雲をわけ行志がの山こえ

(87) よしのなるみねのはなぞのいかばかり

吉野にもはなぞのあり。志賀より吉野の花を思や
るなるべし。

(88) いつかみそめむみねの木の木の本

(89) としゝの花に岩ふむよし野やま

花みにのみ年々行て、隠遁の心のなきをなげくにや。
世にすめばうさこそまされみよしのの岩のかけ道ふ
みならしてん

(90) 又けふ行もしらぬやまゝ

(91) 花見にといくしら雲にまよふらん

岩ねふみかさなる山を分捨てはなもいくへのあとの
白雲

(92) むかしをば人のかたるもはるけきに

(93) はなこそそのこせ志賀のふるさと

花こそそのこせなど、あたらしき作意にや。

あすよりは志がの花ぞの稀にだにたれかはとはむ春
の古郷

さざ波や志がの花ぞのみるたびにむかしの人のここ
ろをぞしる

(98) 春こそ人はあらぬさまなれ

(99) うかるなよ見ざりしはなはいつさかむ

(欠損)

5

133

も末まではたれの侍らん。たゞ昨日のはなの一さ
かりぞと世中を觀じたるにや。返々しらすく。

138

なぐさめがたきこの世なりけり

139

ふる郷は老木のはなにまつのかぜ

これは一とせ連歌合の前句のいか様にも沈思と
おほ^(ママ)大かたは見え侍れど筆には尽しがたし。只み
る人の心の浅深によるべし。

140

ちぎりのすゑをたのむはかなさ

(欠損)

6

145

故郷の花みる袖の露けゝに見え侍る様にや。

146

こころほそきもたれかしらまし

147

人なみにはなみてかへる草のいほ

はなをみる人、さまぐ心ぐなるべし。花をの
み見る人と有心とのさまにや。

148

すてたる世をばわすれはて、き

149

花鳥をみ山のいほに又なれて

柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれ詠てけりなあぢ

きなのみや

(欠損)

7

155

水無瀬に尾上の宮あり。

156

柴の戸をさびしとみてや帰るらん

157

しほる、はなの夕ぐれの宮

しほる、花の夕こそ見所はある物をと、婦人を思
ふにや。

160

いつはりなきやいろに出らん

161

ちりそめしその世をはなのうらみにて

偽のある世に、花はちりそめし時をたがへぬをう
らむるなるべし。色といふより花をいひ出たるな
るべし。

(欠損)

8

191

をみていづるにや。

192

いろくわたるよの中ぞうき

193

さくらばなかせをいとへば雨ふりて

世中の様なるべし。色々とあるに花をいひ出した

るべし。

196 はかなの春やなにたとへん

197 あさ露のきえぬかぜにもはなちりて

詞のつづき作意いふばかりなし。これも連歌合の句なり。

198 いとふとて今はうらみむかたもなし

9

199 ころともちるはなのやまかせ

見え侍るばかり也。心ともちるなど珍重々々。

200 春をば人のおしまぬもなし
風ならで心とをちればなうきふしにだに思ひをくべし

201 花ぞうきなにの心にちりぬらん

花をいさくかこつ心にや。

山陰にすまぬ心はいかなれやおしまれて入月もある世に

此歌のおも影もあるべし。

202 ふきもなどをらで風のよはるらん

203 ころとちらはなぞなをうき

(欠損)

10

495 花ぞの、こてふをさへや下くさに秋まつむしはうと

くみるらん

496 す、きちる夜の風のはげしさびしさ

497 きりくすかたぶく月にこゑ深て

498 はつ霜まよひかりのなく声

499 ころもうつすその、こずゑ色付て

此二句、又、明也。薄ちるよのさま、かりのくる

時の景氣に心を付てみ侍るべきにや。

502 うつろふ山ぞそでのいろなる

503 白妙のころもうつ夜に月深て

白妙の衣、月のひかりうつろふ山を袖

(欠損)

11

526 まはぎさく野に人ぞやすらふ

527 夕まぐれ鹿なくやまの月まちて

528 霧かゝるみなとの山や時雨らん

529 るな野をゆけばをじかなくこゑ

530 やまはいづくぞ秋きりのうち

(531) 男鹿鳴草の庵の窓の前

山はいづくぞ、眼前にて霧のうちうたがふにや。

(532) 身にそはぬ心は人にあくがれて

ふゑをつまなる鹿のあはれさ

(534) もとのなみだにかへるおくやま

(欠損)

12

(572) かげもはつかの月のあはれさ

(573) 秋ははやゐなのあを山うつろひて

はつかの月を名所のはつかの山の月にいひなせり。

ゐなの青山、おなじ所の名所なるべし。

秋はつるはつかの山のさびしきに有明の月を誰とみ

るらん

(574) 人にさていかゝかたらんおきつなみ

(575) 龍田の山のあきのいろく

心は明也。

(576) われからぞたゞおもひこがる、

(欠損)

13

冬連歌

(602) さびわたりけり神かきのいろ

(603) やまかぜにみむろのこずゑ冬立て

神かきのみむろの山に霜ふればゆふしでかけぬ榊葉

ぞなき

さびわたりたる神がきの色とある前句、能々吟味

すべし。

(606) こえ行山のあとをこそみれ

(607) くれわたるふもとの月のひとしくれ

(608) 雲なき月のあかつきの空

(欠損)

14

(706) 冬ごもるとしの暮こそかなしけれ

(707) 雪に友なき老が身のやど

みえ侍るまでなるべし。

(708) 車も三の子をおもふみち

(709) 行名残おほ井のやどの雪の日に

前句大事也。松風の巻やらん、明石の姫君三歳に

て大井の宿より御車にて、紫上の養君にいざなは
れ給ひけん雪の日の事にや。行名残は明石の上の
心なるべし。三の子をおもふは

(欠損)

15

(797) かりねの山のあかつきの雲

(798) こなたかなたの山水の声

(799) 旅ねするたかねに秋の夜はふけて

(800) 草もむすばぬみちいかせむ

(801) みねたかみ雲を一よのまくらにて

此五句又みえたるばかりにや。感情あまりあり吟
味すべし。

(802) 心ほそさのまさる夕暮

(803) 雲とりをしる人にする山こえて

(804) 身の行すゑをおもふあはれさ

(欠損)

16

となき犬のこゑを人家の伝とおもふ心あらんかし。

(826) たびの門出をいそぐこゑ

(827) 夜はのやどにはとりなければ犬ほえて

みえたるまでなるべし。

(828) ともすればなみだならでは身にそはず

(829) 山ちのしぐれ野ちの夕露

神無月時雨ばかりを身にそへてふかき山ちにおもひ入哉

(830) ほどちかく袖ふる山をかへりみて

(831) われまちつれよみねのしら雲

(欠損)

17

(903) 毎句有心、艶なるものなるべし。よくく心を付

らるべし。

(904) しらぬもつらししらるゝもうし

(905) きけかしな世にこそ忍ぶおもひなれ

おもふ人はしらで、世にはしらるゝうらみにや。

(906) こゝろともなきあきかぜのころ

(907) ゆふぐれやしらず涙のぬしならむ

(908) たが袖としらでも露やこぼるらん

(909) 身のうきまゝにかこつ夕ぐれ

(914) をぎふくかぜにたれをまちみん

- 18
- (915) うき秋も君こそしらむ夕なれ
- (916) おもひすつなとまつかせぞ吹
- (917) たのみこしゆふべつもりてよはる身に
此四句、みな恋を夕ののがのやうに思ひいふなるべし。
- (918) 日ぐらしなげばなみだおちけり
- (919) こめやとおもふをいかでたのむらん
こめやとは思物からひぐらしのなく夕ぐれはたちま
たれつ、
- (922) まよひさとりはこ、ちにぞある
- (923) 夕暮の野でらの鐘に人まちて
- 19
- (951) しのびかよひの夕やみのそら
- (952) わがこゝろ人のうきをやわするらん
- (953) 月をくもれとしのび行みち
此三句、とりどしのびがよひのくるしきさま心
を付みるべきにや。
- (954) こゝろをみてやいとゞつれなき
- (955) あはずとてかよひはやまじ夜はの空
- 20
- (1006) うきもなくさむおりもこそあれ
- (1007) きぬぐにうらみし鳥の跡を見て
鳥のあととは後朝の文にや。別ちにはうらみし鳥の、
又筆の跡にてはなくさむ心にや。これも今すこし
いり過たるともいふべからん。
- (1008) おもふに似たるふみなをくりそ
- (1009) いそぐ夜のあしたわびしきひとりねに
後朝の文はまた夜ふかきなるべし。
- (1010) まれにあふ身の又いかならん
- (1011) わかれしはあさつま山を名ごりにて
- 21
- (1057) 秋はふけ人はつれなきよるごとに
- (1058) ながき夜つらくまちぞわびぬる
- (欠損)
- (956) ものいふほどのたよりをぞきく
我心のしうねきをみてや、いとゞ人のつれなきと、
をしはかる心なり。

(1059) こぬ人もみるらむものをそらの月

此三句、又艶に哀ふかく、なをざりにておもひえ
がたきにや。心は明なり。

(1066) つかのまもやすむ時なきおもひにて

(1067) たま〜みればひとふでのあと

つかのまを、筆のつかにとりなせり。

(1070) とはずはあすもなにかたのまむ

(1071) 一ふでの跡こそせめて命なれ

契しくれの、人はこで文のみあれば、せめてこの
一筆を命にやと也。

(1068) なにをなさけとなをしたふらん

(1069) てやふれしとばかりかへすふみをみて

返し侍る文を、せめて君がてやふれしとばかりを
情にや、思ふ心のはかなさなるべし。

(1072) たち行鳥のあとものこらす

(1073) しのびつるふみをけぶりになすもうし

前句、たち行鳥の跡、いづれもとりなしにて付ら
るゝなるべし。たち行を

(欠損)

22

(1131) たえねたゞはふ木はよそのたまかつら

玉かつらはふ木あまたに成ぬれば絶ぬ心のうれしげ
もなし

(1132) かぜのみさはぐ夕ぐれのあき

(1133) たのめしはきりのした葉のをともせで

桐の葉もふみ分がたく成にけりかならず人を待とな
けれど

葉のひろき物はかぜさはぐなるべし。

(1134) ものおもへとはなどちぎるらむ

(1135) たのめずは侘つゝもねん雨の夜に

月夜にはこぬ人またるかきくらし雨もふらなん侘つ
つもねん

(1138) あふ夜はいつかとかむしたひも

(欠損)

23

1179

此二句、我心何も我しわざぞといふ心なるべし。
あふいことやうきはいまをかぎりといひをきて

1182

あふことはいまをかぎりといひをきて

(1183) なをこひしくは身をいかにせむ

(1184) 中く^レにたつ名も今はいとほめや

(1185) いくほどありてこひもうからん

此二句、又見え侍るまでにや、下の句は毎句かや
うにやすくと心ありて案すべきとぞ。

(1188) いくほどならぬ身をぞ侘ぬる

(欠損)

24

[1393] 音をもらせとなるべし。草庵の雨きく人もなきを

庵主のいへるにや。

(1394) 岩のかたちも水きよきやま

(1395) すむ人のむかししらるゝ庭ふりて

波をとほ川せき入ておとす滝津せに人の心のみえ
もするかな、など思へる句にや。

(1396) ほたるとび行くれのすゞしさ

(1397) たちいづる山まつの戸に雨過て

秋深^ケ雨終^テ松堂^{シツカテリ}静^{シヅカ}一点^{シツ}山螢^{ケイ}照^ス寂寥^{シヨウ}

(欠損)

25

(1421) さまぐ^レのかたちをみするそらの雲

(1422) たきつなみよるの岩ほの床さえて

(1423) みやまの月にさるさげぶこゑ

此四句、又別の心もみえ侍らず。

(1424) ねぐらをいづるとりのこゑぐ

(1425) むさ、びのさはく深山に日は暮て

むさ、びは鳥をとる物なるべし。高円山にもよめり。

(1426) もとのさとりに身こそとをけれ

(1427) けだ物のはしるやゆみにをそるらん

(欠損)

26

しわざ如此。

(1901) 柳かげちらで秋たつし水かな

納涼なるべし。

[1900] 伊勢国司亭にて千句侍しに納涼の心を

(1902) むすべ露さ、わけし袖の朝すゞみ

さ、わけしあさの袖よりもなどあり。あさの袖は
朝の袖也。

(1904) 陰すゞし苔にちりなき庭の松

(1905) 雨すゞし雲のあなたやあきの月

(欠損)

27

1947 見所おほき発句にや。

池田民部丞許にて秋の発句に

(1948) みねの松そめぬも雨のこゝろかな

紅葉の松の緑をみ侍るさまにや。

長尾肥前守許にて時雨を

(1949) しぐれよりこゝろはそめぬ山もなし

心の色時雨よりふかゝらんとや。

(1950) 宇津の山こえ侍し時蕙の葉の色こきをみ侍て

(1951) 宇津の山こゝもたつたの紅葉かな

(欠損)

28

(1976) 色こきはあらしにちかき木葉かな

只今の落葉にや。

(1977) 吹たびのかぜの色わくおち葉かな

おなじさまにや。

冬の発句の中に

(1978) 木がらしの庭は紅葉の千ぐさかな

(1980) こがらしに吹やおちばの松のかぜ

こまやかなる発句見所もおなじ。

白川の関にて

(1981) こがらしにおもふみやこのあを葉かな

(欠損)

(極札)

(表)

連歌軸 宗碩 連歌老葉之内

祇庵主人

一卷(琴山・黒方印)

(裏)

半本継合巻物 己未八(栄・黒小判形印)

4 解題

『老葉』は宗祇自撰の句集である。初編本と再編本があり、初編本は句のみで注はない。再編本の編集については自注本の奥書に、初編本のなかに宗春(兼載¹⁹の前名)の句を変則的に収めたこ

とが兼載の不満を招いたため「あみなをし」たことが記されている。再編本は兼載の句をすべて切り出し、初編本の句を二分の一ほど厳選し、宗祇の第一自撰句集『萱草』からの再録句と近年の作とを合わせて作られた。再編本には無注本と加注本があり、その加注本に自注本、宗長注本、両注併載本がある。成立時期は、初編本が一四八一（文明十三年）、再編本が一四八五（文明十七年）とされる。²⁰⁾

この両注併載本は宗祇の自注と宗長注とを句ごとに並べ挙げるもので、『愚句老葉』として、至便な参考書として版を重ねた。また他の宗祇句集の伝本が少ないのに対し、『老葉』は伝本が多く、写本のみならず刊本まで存在することから、宗祇の代表的撰集と認められていたと考えられる。²¹⁾

今回、ソウル大本の復元作業にあたって当初『愚句老葉』を使用したこともあり、まず、この最終形態と考えられる『愚句老葉』とソウル大本を比較すると、ソウル大本は、『愚句老葉』と同じ句数であったと考えると、たとえばブロックごとに見て数句ずつ句が欠落している（表3）。ということは、ソウル大本の方が『愚句老葉』より先に存在していたわけであるから、『愚句老葉』はソウル大本以後、数句ずつ付け加えられている箇所があるということになる。

両者の相違については誤読、誤写、脱字によると思われるもの

のほか、次のような相違もある。たとえば（31）注「ならんかし」は『愚句老葉』では「にや」、（149）注「詠てけりなあぢきなのみや」は『愚句老葉』では「ながめてけりなうらめしの身や」とあるほかである。句の順序が入れ違っている場合もあり、（1068）（1071）は、ソウル大本では、（1070）（1071）（1068）（1069）の順になっている。

また『愚句老葉』宗長注（『愚句』）とは異なる、ソウル大宗長注（ソウル大）四カ所が次のように見出せる。

（87）吉野にもはなぞのあり、志賀より吉野の花を思やるなるべし（ソウル大）

花園、吉野にもあり、是ハ志賀の山こえにて、吉野も

いかはかりと思ひやる心なり（『愚句』・自注と異なる）

（1902）さ、わけしあさの袖よりもなどあり。あさの袖は朝の袖也（ソウル大）

笹わけし朝の袖よりもなど有（『愚句』・自注に同じ）

（1948）紅葉の松の緑をみ侍るさまにや（ソウル大）

岑の松のミとりたくひなく面白けれハ、雨も心ありて染めかと云心也（『愚句』・自注に同じ）

（1949）心の色時雨よりふか、らんとや（ソウル大）

時雨より心ふかく染と云心也（『愚句』・自注と異なる）

しかし各注は言回しの相違であつて、意味内容の相違ではない。

また一カ所(529)について、ソウル大本には宗長注が付けられていないが、『愚句老葉』には宗長注として「旅ねするゐなの湊に聞ゆ也鹿の音おろすミねの松風」とある。今後別の系統本の確認作業が必要である。『愚句老葉』自注には「所にさま時節の景気也」とあり、この宗長注とは異なる。

次に、ソウル大本と蓬左文庫本を比較する。まず比較対象として蓬左文庫本を取り上げた理由は、ソウル大本と同じ宗長注本であることに加えて、①完本であること、②管見の限り諸本研究として検討されていないこと、③書体から書写年代が室町時代末期～江戸時代初期のものと思われ、室町時代後期と考えられるソウル大本に近く、宗長注の初期形態が確認できること、④蓬左文庫からのご教示によれば「伝来は不明」ということであるが、宗長注本は序文によれば、永正十七年(一五二〇)三河国(現、愛知県)の東部 水野和泉守藤九郎近守の求めに応じたものであるといひ、その土地に近い名古屋市蓬左文庫に現存するものであることが挙げられる。特に②の諸本については、両角倉²²⁾によって分類整理されているように、加注本のなかで宗長注本が最も多く、蓬左文庫本を含めて二十三点挙げられている。しかし宗長注本についての具体的な考察は見当たらない。

両本を比較すると、句数ではソウル大本が極めて少ないが、句

の順番、加注、句数、句の順序が逆になっている場合があることや、右に挙げた四カ所の「注」、一カ所の宗長注欠落も同じであることが指摘できる。ここからソウル大本と蓬左文庫本は同じ系統であると考えられる。また両角氏によれば、宗長注本は、a両注本の宗長注に近い本文、b異同の多い本文、c両者の中間的な本文に細分できるといふが、ソウル大本はaといえよう。

さらに、ソウル大本の次の二カ所には、言葉が書き添えられている。

(496)す、きちる夜の風のはげしさ^{さびし}

この句の場合、蓬左文庫本には「薄ちるよの風のはげしさ」とあるが、『愚句老葉』では「す、きちる夜の風のはげしさ」とある。ここから、ソウル大本(室町後期)のころには「はげしさ」と「さびしさ」とがあり、蓬左文庫本(室町末期～江戸初期)のころには「はげしさ」が使われ、『愚句老葉』版本として流布した江戸中期ごろには「さびしさ」が使われることがあったといえよう。次に、

(1179)注 此二句、我心何も我しわざぞといふ心なるべし。

あふ^{いやうき也}ことはいまをかぎりといひをきて

(118) あふことはいまをかぎりといひをきて

この注・句の場合、蓬左文庫本には、

此二句、我が心何も我がしわざといふ心なるべし。
逢ことはいまをかぎりといひおきて

とある(句読点は筆者による)。ここでは『愚句老葉』を含めて考えても残念ながら「いやくき也」の説明はつかない。しかしソウル大本が、「あふことはいまをかぎりといひをきて」という句を重複して写したことはわかる。ここから、(117)の直後に(118)が続いていたといえる。またソウル大本とともに蓬左文庫本にも『愚句老葉』(118)の句はない。さらに『愚句老葉』(118)の句の右上部分には「長本二なし」とある。

留意しておきたいのは、ソウル大本には紙継ぎに関する疑問が残されていること。たとえば序文の次に明らかに「注」の終わりとわかる部分を継いでいるのはなぜか、また紙継ぎは「注」からそのうち五枚は「注」の途中である。さらに紙継ぎがないにもかかわらず、一紙に、番号がまったく異なる部分の連歌が記されて(写されて)いる(表2 No.7・8・9・12・19・21・22・23)。写さ

れた時に、元の欠損のまま写されたといえる。錯簡以前に錯簡があったのであろうか、それとも何か考えがあつてのことであらうか。この場合もまた「注」の途中から写している(句番号31・41・825・903)。一般的には前句、付句、注の順に写すものである。今後さらに『老葉』加注本を広く収集した上で検討していきたい。

注

- (1) 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編『紺碧遙かに——京城帝国大学創立五十周年記念誌』(京城帝国大学同窓会、一九七四年)の五〇頁によれば、「終戦直前には六十五万冊の収蔵」を誇ったという。加藤聖文・宮本正明編『京城帝国大学附属図書館和漢書書名目録』(旧植民地図書館蔵書目録 第一―三巻)ゆまに書房、二〇〇二年。
- (2) 宗碩・連歌師、生没年一四七四(文明六)―一五三三(天文二)。宗碩に師事、宗長・肖柏に兄事。一五二一(永正八)年、北野連歌会所奉行、宗匠。
- (3) 宗祇・連歌師、生没年一四二一(応永二十八)―一五〇二(文亀二)。一四八八(長享二)年、北野連歌会所奉行、宗匠。一四九五(明応四)年、『新撰菟玖波集』を完成させる。
- (4) 両角倉一『宗祇連歌の研究』勉誠社、昭和六十年、五七―六〇、九二―一二七頁。頼原退蔵『宗祇の萱草・老葉・下草』『頼原退蔵著作集』第二巻、中央公論社、昭和五十四年(松井博士古稀記念論文集)目黒書店、昭和七年所収)。矢野環『老葉』に対する系統的アプローチ——宗祇による連歌の系譜』中尾央ほか編『文化系統学への招待——文化の進化パターンを探る』勁草書房、二〇一二年。

- (5) 宗長・連歌師、生没年一四四八(文安五)～一五三一(享祿五)。宗祇に親炙、その没後、連歌界に第一人者として迎えられた。
- (6) 「愚句老葉(版本)」(翻刻)金子金治郎編『連歌古注釈集』(角川書店昭和五十四年)および早稲田大学蔵資料影印叢書第二十卷『宗祇連歌集』(早稲田大学出版部、一九八八年)の影印を使用。
- (7) 本資料については、「ソウル大学校蔵 宗養・龍山兩吟『永祿五年八月十一日 賦何人連歌』」として紹介する予定。
- (8) ソウル大学校図書館からのご教示による。
- (9) 「年譜」『高木市之助全集』第十巻、講談社、昭和五十二年、四七八～四七九頁。
- (10) 『国語と国文学』第四十五巻上、東京大学国語国文学会、昭和四十三年、一四〇頁。
- (11) 『国語と国文学』第五十七巻二、東京大学国語国文学会、昭和五十五年、五六～八二頁。
- (12) 『国文学攷』第二十八号、広島文理科大学国語国文学会、昭和三十七年、四三三～四三六頁。
- (13) 通堂あゆみ「京城帝国大学法文学部の再検討——法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に」『史学雑誌』第一一七編第二号、二〇〇八年。
- (14) 麻生磯次が昭和二十年夏に連句を巻いたことなどが逸話として残されている(前掲注(11)『国語と国文学』第五十七巻二、六六～六八頁)。
- (15) 大島俊子「宗長年譜」「女子大国文」第二十四号、京都女子大学国文学会、昭和三十七年。鈴木光保「三河における宗長寛え書き」『国語国文学論集』松村博司教授定年退官記念「名古屋大学国語国文学会、一九七三年。『刈谷市史』第二巻近世、平成六年、三六～三八頁。松島周一「戦国期東西交通における智多と尾張」『日本文化論叢』第十七号、愛知教育大学日本文化研究室編、二〇〇九年、二〇～二二頁。
- (16) 村上翠亭・高城弘一監修『古筆鑑定必携 古筆切と極札』淡交社、平成十六年、一二、八六、一〇六、一〇八頁。古筆三代了佑は、一六七八(延宝六)年十月八日に七十二歳で没した二代古筆了榮の八男で、一六八四(貞享元)年四月二十日、四十歳で没した。
- (17) 前掲注(6)「愚句老葉(版本)」(翻刻)『連歌古注釈集』を使用した。
- (18) 名古屋市蓬左文庫蔵。『老葉集』二冊(十巻)。同文庫によれば、目録には室町末期写とあり、伝来は不明という。序跋を備え、巻尾に逍遣子(三条西実隆・一四五五～一五三七)の名が見出せる。宗長注本としては最も善本という(小西甚一ほか校『宗祇連歌集 老葉』古典文庫、第七十四冊、昭和二十八年、一一～一二頁)。
- (19) 兼載・連歌師、生没年一四五二(享徳元)～一五一〇(永正七)。猪苗代氏。心敬に師事。一四九〇(延徳二)年、宗祇辞任に伴い北野連歌会所奉行、宗匠に就任。
- (20) 前掲注(4) 両角倉一「再編老葉」の諸本の性格」「宗祇連歌の研究」並びに長谷川千尋「老葉注」解題」京都大学文学部国語国文学研究室編『京都大学蔵 貴重連歌資料集』第二巻、臨川書店、平成十五年。
- (21) 前掲注(6)「愚句老葉(版本)」解説『連歌古注釈集』。
- (22) 前掲注(4)「再編老葉」の諸本の性格」「宗祇連歌の研究」。

参考図書

- 伊地知鉄男ほか編『俳諧大辞典』明治書院、昭和三十二年
- 尾形仍ほか編『俳文学大事典』角川書店、平成七年
- 廣木一人編『連歌辞典』東京堂出版、二〇一〇年
- 木藤才蔵『連歌史論考』下、増補改訂版、明治書院、平成五年

附記

本稿をなすにあたり、奥田勲先生（聖心女子大学名誉教授）から貴重なご教示を賜りました。また資料調査につき李相燦先生（ソウル大学校）、安基澤氏（ソウル大学校図書館）、松田利彦先生（国際日本文化研究センター）、森万佑子氏（ソウル大学校・東京大学大学院）、名古屋市蓬左文庫、国際日本文化研究センター研究協力課のご助力を得ました。記して謝します。

本稿は、人間文化研究機構「日本関連在外資料調査研究」韓国班の助成による成果の一部である。